

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	孫 于恵
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 消費文化を映す日本現代文学の〈悪女〉考 —東野圭吾の推理小説を中心に—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)		教授	佐藤 利行
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		准教授	李 郁蕙
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		助教	劉 金鵬
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、消費文学市場における「東野」文学の状況を把握するために、東野圭吾の推理小説を中心に、特に「悪女」を視座として研究したものである。論文は序論、第一章「消費文化を映す『東野』文学」、第二章「東野圭吾と推理小説、そして『悪女』」、第三章「〈悪女〉のいろいろ」、第四章「『東野』文学における〈悪女〉」、終章の全六章から構成されている。</p> <p>序論では、研究の背景と目的を論じ、東野圭吾および作品における女性像に関わる先行研究と、現代文学における「悪女」に関する先行研究とを整理し、先行研究における問題点を述べる。</p> <p>第一章では、日本国内の消費市場における「東野」文学の状況を把握するために新聞や雑誌などの記事を整理、分析した。東野圭吾の文学が我が国の消費市場にいかにか受容されていたのか、ということに加え、東アジア（中国・韓国）および欧米における消費市場についても「東野」文学の販売数、映像化の現状に視点を絞って詳細な分析を行っている。またCOVID-19の世界的流行に伴う「東野」文学の現状についても検討を加えている。</p> <p>第二章では、儒教社会と日本人女性の生き方について整理し、儒教的価値観の中での男女の関係、儒教的理念に合致する理想的な「良き女」と「婦道」に抵抗する「悪い女」との区別について論じている。また、東野圭吾の作品に影響を与えたとされる松本清張の作品における悪女像にも触れながら、推理世界における悪女のイメージについて論述する。推理小説において、男性犯罪の設定に読者が嫌気を感じた時に、伝統的な意味での弱者である女性に犯罪動機を付与させて〈悪女〉へと進化させるという「東野圭吾式の悪女」の存在があると指摘している。</p> <p>第三章では、所謂「悪女」について、辞書的な意味を再確認するとともに、現代文学における「悪女」の文学的変遷について論じている。筆者は敢えて〈悪女〉と表記することによって、所謂「悪女」との差別化を図っている。すなわち〈悪女〉とは、男との関係において生ずるものであって、男性側から判断される女であることを論証する。</p> <p>第四章では、東野圭吾の代表作である『白夜行』『聖女の救済』『容疑者Xの献身』を取り上げ、二項対立という視点から悪女像についての分析を行っている。「東野圭吾式」の〈悪女〉とは普遍的意味での悪女とは全く別物であり、その意味では「ファミ・ファタル」と呼ぶ方が相応しいということ</p>			

を論証する。

結論では、本研究をまとめ、今後の課題について述べる。

以上、本論文は、東野圭吾の作品を取り上げて、そこに見られる悪女像についての分析を行い、同時に消費文学市場における「東野」文学の位置づけをしようとする論文である。「悪女」と「消費文化」という二つの視点から「東野」文学の特徴を明らかにしようとする試みは意欲的であり高く評価できるが、一方で論点が定まらなかったという感も否めない。また文学の消費市場において、日本を中心として東アジアや欧米についても論究しているが、電子書籍やCOVID-19の影響などについては、更に論証を加えなくてはならない。「東野」文学における〈悪女〉の分析も、同時代の作家との比較、文学史における位置づけなど、なお検討すべき課題も残るが、今後の研究の進展が期待できる好論文である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)